

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Ethnography : Some Mythical Aspects of Djinang Country

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松山, 利夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003602

カントリーとワンジル

——アーネムランド・アボリジニ、ジナン族の故地をめぐる論理——

松 山 利 夫*

- | | |
|---------------------|----------------|
| I. はじめに | IV. カントリーとワンジル |
| II. ララジェジェの神話と遺体の処理 | 1. ムッカルの旅 |
| 1. ララジェジェの神話 | 2. カントリーとワンジル |
| 2. ホロー・ログあるいはラルカン | 3. 天空のワンジル |
| III. 人の魂と血と汗 | V. まとめ |
| 1. 影の魂と真の魂 | 1. 白人の出現とカントリー |
| 2. 人の血と汗 | 2. 生きている証し |
| 3. 媒体としての血と汗 | |

I. はじめに

ジナン Djinang族（言語グループ）をはじめとする中部アーネムランドのアボリジニ社会は、1950年代から70年代にかけて、急速な社会変化をとげる。

それは第二次大戦を契機にしてこの地域のアボリジニが、この頃ダーウィンへ大量に移住したことにはじまる。政府はこれを收拾しこの地域のアボリジニを同化させるため、57年にアボリジナル・タウン、マニングリダ Maningrida を建設し、ジナン族をはじめとする中部アーネムランドのアボリジニを集住させる。その結果、異部族が混住することとなり、そのことが部族間の抗争を生むなど、彼らの生活にあらたな緊張もたらされる。

そうした状況のなかで、60年代末から失業保険などの社会保障金が給付されると、これをひとつの契機として、彼らは貨幣経済にくみこまれる。それはやがて、小麦粉や缶詰などマーケット・フーズへの大幅な依存を主因とした、採集の放棄へとその生活を変容させる。

その一方で、この地域のアボリジニは、木皮画や彫刻をはじめとする工芸品をあらたに商品として生産するとともに、60年代末からのアウトステーション（小集落）の

* 国立民族学博物館 第一研究部

建設をつうじて、彼らの社会を再編成するという過程をたどった。そして80年代には、彼らは散弾銃やトラックなどの文明の利器を使用する「現代の狩猟民」へと変容したのである。つまり、ジナン族をはじめとする中部アーネムランドのアボリジニ社会は、急速な現代化の過程を、短時日のうちに経験したことになる【松山 1990: 788-793】。

その彼らは、現在も父系クランの祖先が暮らしてきた故地、つまりカントリーへのつよい「愛着」をもち、そのカントリーに自らの存在のよりどころを求めている【PETERSON 1983: 138; 松山 1990: 817】。それが人の誕生と死にかかわるのであれば【PETERSON 1975: 63】、カントリーはアボリジニの宗教のなかで明確な位置を占めるはずである。

この報告では、ジナン族を例に、遺体の処理に関する神話と人の魂、および人の血と汗に関する彼らの説明を手がかりとして、彼らの精神世界のなかでカントリーがどのように認識されているかについて考察を加える。

それは60年代末から70年代はじめのアウトステーション運動に、これまでとは別の説明が可能なことを明らかにする。従来この運動は、当時のアボリジナル・タウンに特徴的であった歴史的な状況の結果であると説明されてきた。確かにアウトステーション建設の契機は、こうした社会的な要因に求められる。しかし、彼らがアウトステーションを建設したところは、祖先が暮らした土地であるカントリーないしはその近くである。その立地選択には、彼らの精神世界におけるカントリーの認識のありようが反映されたとみられる。そうした内的な要因からも、この運動は説明されるべきである。

これらの問題を明らかにするため、ここでは、筆者が採録した神話をまず記述する。ついで生ある彼らが「愛着」をもつカントリーと、人の魂がとどまる場所としてのワンジル Wandjir とがどのような構造的な関係にあるのかについて説明する。

そのための神話をはじめとする資料は、1984, 86~87, 88~89および90年に中部アーネムランド、ジナン族のアウトステーション、ガマディでの調査によってえたものである。それは、おもにガマディのリーダー、ウヌウン WunuWun 氏（ドゥア半族、推定年齢60歳）が語ったところによる。したがって、ここに記述される事柄はドゥア半族のものであり、とくにことわりのない限り、イリチャ半族にはふれていない。のちにいくつかの民族誌から引用することになる事柄や神話についても、この原則はかわらない。

II. ララジェジェの神話と遺体の処理

1. ララジェジェの神話

「創世時代の精霊ムッカル Mukkarru が樹皮製のカヌー（デルカ Derrka, 別名ムッカル Mukkarru）で最初の旅にでたとき、彼はダツの一種ララジェジェ Larajeje をみいだした。ララジェジェが水面をジャンプしながら旅していたのだ。ムッカルはララジェジェをごちそうにしようと思いきりヤリをもって狩りにでかけたが、ララジェジェが海草の中に逃げこんだのでとれなかった。

ムッカルが巨大なララジェジェを見つけたとき、同時に彼はララジェジェの骨を見いだした。ムッカルは骨に話した。『もしわしが死んだら、わしは骨をホロー・ログ hollow log の中に入れよう』。

彼は最初に上陸し、乾いた土地を見つけたあと再びカヌーにもどり別のカントリーへの旅をつづけた。あるときムッカルはその巨大なララジェジェに喰われてしまった。ララジェジェはカヌーも男も喰った。ムッカルがララジェジェにのみこまれて死ぬと、ララジェジェは彼の骨をすべてはきだした』。

このララジェジェの神話は、創世時代の精霊ムッカルの旅の一部として語られる。海を旅するムッカルはララジェジェの骨に「わしの骨をホロー・ログに入れる」と話しかけたあと、彼はララジェジェに喰われる。するとララジェジェは骨をはきだす。別のバージョンでは「ムッカルの骨はララジェジェの中に残ったが、トイレにいくたびに骨がでてきた」、つまりララジェジェは骨を排泄すると語る。

この短い神話が、ジナン族のカントリーへの「愛着」や「存在のよりどころ」を検討する最初の素材となる。それを分析するためには、この神話が現実の生活とどのようにかかわるのかを、明らかにする必要がある。そこで、ジナン族を含むアーネムランド・アボリジニがおこなってきた遺体の処理についてみてみよう。

1935～37年にジナン族を含むアーネムランド・アボリジニの葬送儀礼を詳細に観察したトムソン D.Thomson のフィールド・ノートを整理したピーターソン Peterson の報告 [PETERSON 1976: 97-108] によると、彼らの社会における伝統的な遺体処理の手づきは、つぎのように要約できる。まず、①死体 (Moro または Molo) に死者のクランに特有の模様をペインティングする。このペインティングを初めてみることになる若者 (女性と子供はみることができない) は、長老の腋の下の汗をまぶ

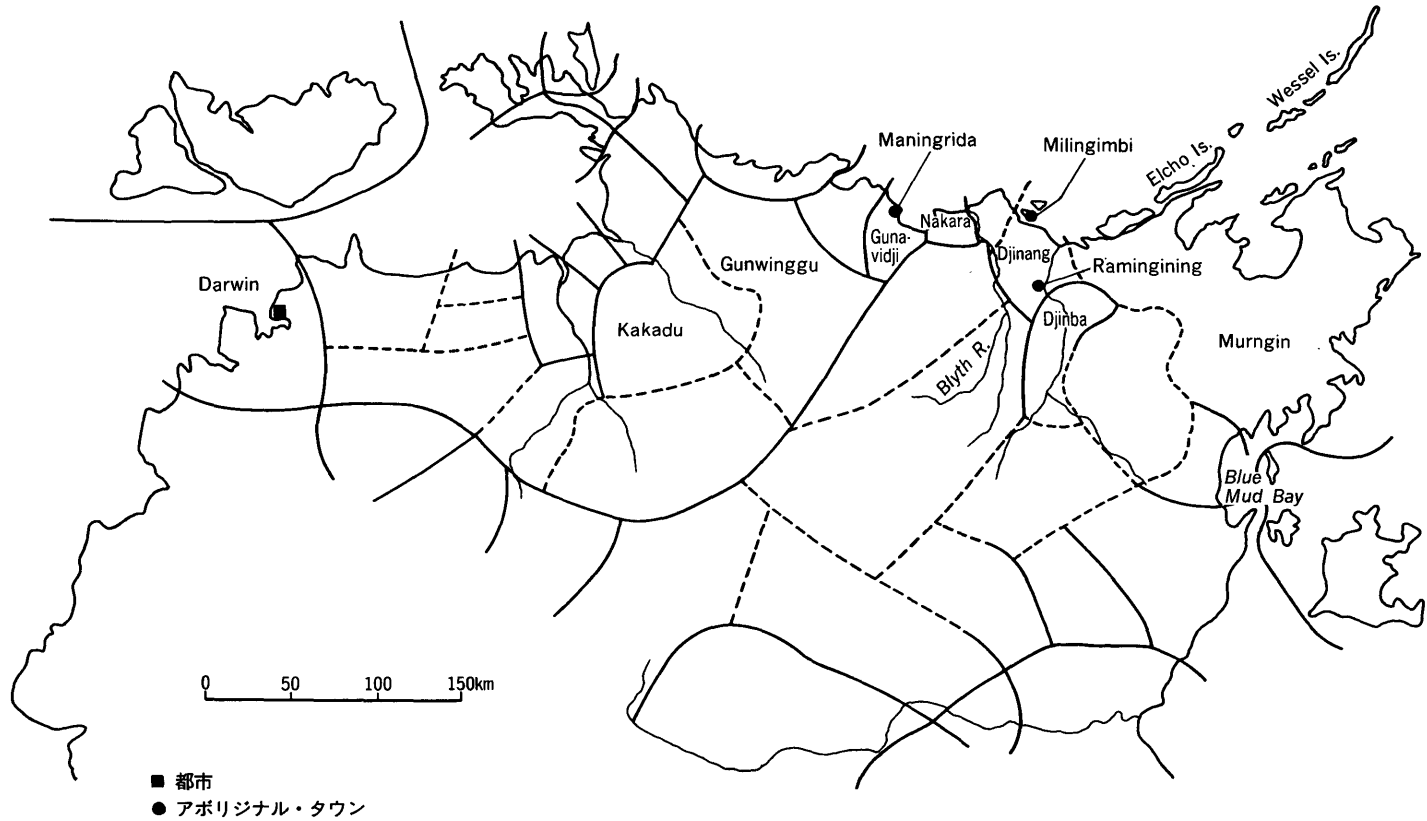


図1 アーネムランドの部族領域 [TINDALE 1974: 付図による]

破線は、領域の不明瞭な部分を示す。

図中には、この報告で言及する部族名と主要な地名のみを示した。

東アーネムランドのムルンギン Murngin は、これに隣接する西側の諸族がこの地域に住む Duwal, Duwala, Dangu などを総称した名称である [TINDALE 1974: 224, 232]。

たにぬらなければならない（この行為については後述する）。ついで一連のうたとおどりが数日間おこなわれたあと、②遺体をキャンプの外に埋葬する。その方法は、③遺体をペーパー・バークの樹皮でおおい、死者の頭を死者の父系クランのカントリーのもっとも神聖な場所である泉の方にむける。埋葬は、④うつぶせかまたはあおむけの伸展葬である。

この1回目の葬送儀礼のあと、2回めがおこなわれる。それはまず、①埋葬後1～2カ月してからの死体の発掘にはじまる。発掘は、そのために選ばれた死者と特定の親族関係にある男性が、素手か先をとがらせた木の棒を用いておこなう。②ほり出した遺体は、下肢から順に骨を素手ではずしていき、最後に頭骨をひろいあげ、③それぞれを水で洗ったあとペーパー・バークの樹皮につつんでキャンプにもちかえり、その一隅に立てた中空の円筒形の柩ホロー・ログに入れる。

これがジナン族を含む中部アーネムランドにおこなわれてきた遺体処理の手づきである。ただし、この一連の処理が必ずしもきわめて古い形態を残したものと断定することはできない。とりわけその最終段階でホロー・ログを使用する処理方法について、1926～29年にムルンギン Murngin 社会（図1）を調査したウォーナー Warner は、つぎのようにいう。「ホロー・ログを用いた埋葬は、ペーパー・バークの樹皮につつんだ骨を岩蔭に埋葬するのに比べてあたらしい。ウエッセル Wessel 諸島ではいま（調査当時）なおそれを使用していない」[WARNER 1964: 460-461]。

このウォーナーの説明にしたがえば、さきのトムソンの観察は比較的あたらしい遺体の処理方法だということになる。そしてその方法は神話とむすびついている。ララジェジェの神話では、ムッカルが死後は自分の骨をホロー・ログに入れると語っているからである。ここに、アボリジニ社会における神話の伝播という問題がみいだされる。その可能性は充分であると筆者は考えるが、いまはこの問題にたちいらないでおきたい。

2. ホロー・ログあるいはラルカン

そのホロー・ログについて、ジナン族はつぎのように語る。

「ムッカルがララジェジェに喰われて以来、人が死んで2～3カ月たつとわれわれはその骨を掘り出し、ララジェジェと同じ形をしたホロー・ログをつくり、骨をきれいにしてその中に入れる。人が死ぬと2～3カ月埋めてそのままにし、ついでホロー・ログ、つまりララジェジェをつくり、彼にこの土地（現実にある土地の意）ブラウィリ Bulawirri を与える。われわれは彼自身のカントリーをブラウィリとして与え

る。骨はこうしておわりになる」。

「ホロー・ログを死者の家族にわたすと、彼らはそれを数年も、それ以上もたてておく。年月がすぎるうちにそれはひびわれ、ペインティングが消える。この頃に死者の名を彼の孫に与える。そして、ホロー・ログそのものをカントリーの大地に埋める」。

このホロー・ログの説明つまり現実の葬送儀礼の手つづきは、ララジェジェ神話の構成とみごとな対応を示す。すなわち、死体を埋葬することは、精霊ムッカルのララジェジェに喰われることに対応し、埋葬した遺体から骨をとりだしきれいに洗う行為は、ララジェジェがムッカルの骨をはき出す、あるいは排泄するのに一致する。また、その骨をホロー・ログに入れる行為には、ムッカルのララジェジェに語った内容との対応が認められる(図2)。ただし、骨を入れるこの行為と、神話に語られる事柄の順序とは逆転する。これは、ジナン族が食用にするダツの一種に精霊ムッカルの喰われること、つまり食うものと食われるものが逆転していることと無関係ではないと思われる。

いずれにしても、この神話にもとづいて彼らは、ララジェジェ(ダツの一種)の姿を模した先端に2本の突起をもつララジェジェという名の柩をつくってきた。そのホロー・ログに、人びとは実在する土地を死者の土地ブラウィリとして与え、それが死者とその親族のカントリーであることを強調する。さらに、ホロー・ログが朽ちてはる頃、死者の名が孫に与えられる。これは後述の汗とよぶ赤坊、つまり孫の誕生にふかくかかわるのである。ララジェジェの神話は、葬送の儀礼のみならず、死と誕生は対置されない[BERNDT 1974: Fascicle 2: 31]とする彼らの思想とふかくかかわるのである。

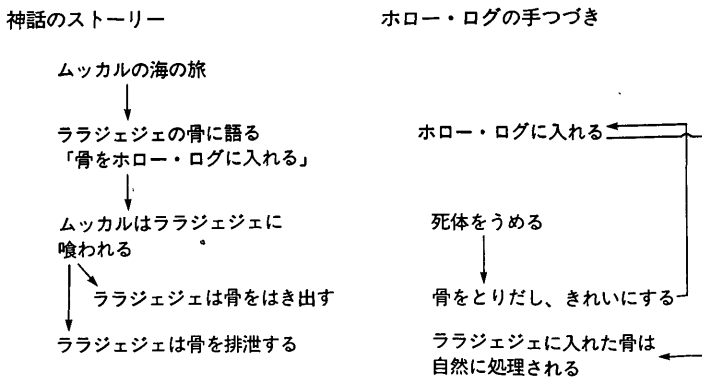


図2 ララジェジェの神話とホロー・ログの手つづき

このドゥア半族に対して、ジナン族イリチャ半族は、ホロー・ログの起源に関する別の神話、カナンガルクンガルクの神話を語る。

「ずっと昔、精霊カナンガルクンガルク Kanangalkngalk は中空の木を伐りたおした。するとその木から水が流れだした。カナンガルクンガルクはその木をつかもうとしたが、水のために丸太は魚のように手からすべりおちた。丸太は水とともに海にむかいたいと思って大地をけずり、小さい川をつくった。しかし大地はあまりにかたく、丸太のさきは人間の指のようにさけてしまった。そこで丸太はあきらめ、水だけを海にいかせることにし、彼自身はその小川にとどまることにした。そして彼は自らをラルカン Larkan とよんだ」[PETERSON 1976: 103]。

この神話にもとづいて、イリチャ半族の人びとは、先端に4つの突起をもつ円筒形の中空の柁を使用する。ジナン族は、半族ごとにそれぞれ異なる神話を語るのである。

Ⅲ. 人の魂と血と汗

1. 影の魂と真の魂

ララジェジェの神話にもとづいて、遺体は処理される。しかし死者の魂はどうなるのだろうか。

ジナン族は、男女ともに2つの魂をもつ。そのひとつは影の魂ともいうべきメルレ Merrle で、存命中は影のように人につきまとう。この影の魂メルレは人の死後、地上にとどまり、夜に限って活動する死霊で、アボリジナル・ドクターを除いて、その姿をみることができない。そのメルレは折りにふれて生前に生活したキャンプに深夜にあらわれて歩きまわったり、ときには人にとりついて原因不明の病気におちいらせる。それが「骨をもたない」とされるのは、埋葬後に遺体から骨をとりはずしてしまうことと符合する。

もうひとつは心に宿る魂で、ウォゴールレ Woggorle とよばれる。この魂は人の死後、死者の血と汗に導かれて祖先の精霊が暮らす土地へ移りすむ。

人が2つの魂をもつという考えは、ジナン族に固有なものではない。再び Warner の報告によると、東アーネムランドのムルンギンも「心に宿る真の魂」、ビルンビル Birimbir (別名ワロ Warro) と、トリックスター的な性格をもつ「影の魂」モコイ Mokoi をもつという。しかも人の死後に真の魂ワロは父系クランの泉にすむ精霊となるのに反して、生前は人の体全体に宿っていたモコイは、人の死後ジャング

ルに入りこむと信じられている [WARNER 1964: 435-436]。アーネムランドの中部から西部にかけては、こうした信仰が存在する。そこで、ジナン族の真の魂ウォゴールレが精霊となる道すじはどのように語られるかを、人の血と汗に焦点をあてて考察する。

2. 人の血と汗

「人が死んで2～3カ月後、その骨をわれわれは掘り出し、ララジェジェをつくり、骨をきれいにしてその中に入れる。骨はこうしておわりになるが、死者の血と汗はなおさまよいつづけ、雨のたびに骨は洗われていく。そして死者のスピリットはあらたな母をさがしあるく。しかし、骨はひとところにとどまったままだ。たとえ死体をマニングリダのような、好ましくない場所にうめても、血と汗は好ましい場所をみつけだす。ドゥアはドゥアの泉をみつけ、イリチャはその正しいところへいくことができる。死者の血と汗は死者のカントリーであるワンジル、別名ブラウィリへもどる。この血と汗をおって死者のスピリットがブラウィリへもどるのだ。「死者のスピリットは同じ家族の中にあらたな母をさがす。たとえば小さな赤坊のような。その赤坊をみたたん、われわれは彼の名を知る。われわれは彼に同じ名を与える。われわれはこれを汗ウルクンディ **Wulkundi** とよぶ」。

「人が死ぬと埋葬したあと、まず小さな穴ワンジルをつくり、その穴の2カ所一西と東一で体をあたためワンジルをうたう。すると、すべての汗がその本来のカントリーへいくのをみいだす」。

「仮にここでもマニングリダでもいい、誰かが死んだとすると、検視がある。しかし、それは好ましいことではない。というのは血もその他のものもすべてもっていってしまうからだ。それらはここにあるべきなのだ。もしも埋葬のときにすべてのものがとられてしまっていると、彼のスピリットをよびもどそうとしてもよびもどせない。そんなときでも、われわれは3～4回試みるだろう。しかし、それでもそのスピリットの応答はえられない。すべてが残されていたら、スピリットの声をはっきり聞くことができる」。

ここに語られている内容のなかで、まず注目されるのは、①動けない骨に対して、死者の血と汗は移動することである。グナビジ **Gunavidji** 族の領域 (図1参照) に建設されたアポリジナル・タウン、マニングリダは、ジナン族にとって好ましい場所ではない。やむなくそこに埋葬されたとしても、血と汗は、死者のカントリーへ戻る。この移動できる血と汗が、魂のひとつウォゴールレを精霊の世界であるブラウィリ、

別名ワンジルにいざなうのである。

②その精霊を人はよびもどす。祖先の精霊をたたえる「星まつり」は、そのひとつの機会である [松山 1988b: 407-435]。精霊がこれにこたえるためには、血と汗が死者のカントリーへもどっていないなければならない。③つまり、精霊となった魂ウォーゴールレは、血と汗とともにある存在である。④そして、その精霊はあらたな母をさがし、その母を介して赤坊に生れかわる。その赤坊を、彼らは汗とよぶのである。それは死者の血と汗の再生を意味する。

これらのことから人がもつ2つの魂のうち、ウォーゴールレが精霊として存在するためには、それを精霊の世界へいざなう媒体としての血と汗が不可欠なことが明らかである。しかもこの血と汗は、有機的な存在としての肉体だけでなく、死後もその当人のカントリーときわめてつよくむすびついている。しかし、死体の検視は、この体系を混乱させた。

ジナン族が居住する中部アーネムランドでは、1960年代なかばから、すべての死体はダーウィーンへ移送され、病院での検視が義務づけられた。それは病死か事故死か、殺人によるのかを調べるためのものであった。この検視のあとに返還されてきた遺体は、彼らにとって「血もその他のものもすべて」とられてしまったぬけがらであり、単なる死んだ肉体でしかない。そのため残された人びとは、その死者の魂ウォーゴールレが、精霊の世界へたどりつけるかどうかを不安に思うようになった。

彼らは検視に抵抗した。「検視がはじまったあるとき、われわれは柩をダーウィーンに送った。しかし白人は水牛の肉のみつけただけで、死体はなかった。その頃、ナカラ Nakara 族（中部アーネムランドの言語グループ）の若者が死亡した。白人はその柩を送りかえてきたが、中には一片の牛肉があっただけだった」。

この説明はアボリジニが検視を皮肉ったこと以上に、アボリジニの死の認識が、死は「肉（体）の死」であるとする白人社会とは異質な点、および彼らにとって肉（体）は骨や血と汗に比べて意味の少ないものであることを暗示する。

また、精霊が汗とともに赤坊に生れかわり、その名前を人びとがただちに知ることは、人が複数もつ名前のひとつを祖父から継承することに対応する。たとえば、ガマディのリーダー、ウヌン氏の水草を意味するその名前は、彼の祖父から継承したものである [松山 1988a: 639-640]。

この単純な事実には、ジナン族の生命観にかかわる思想が反映されている。それは「祖先は消えてなくなるのではなく、単に隠れるにすぎない」 [バンヴェニスト 1986: 228] と表現しうるものであり、生命は個体の生死とはかかわらない、永遠に不滅の

存在だとする思想である。その生命が人では「小さな祖父」[パンヴェニスト 1986]として再生する。こうした思想は、生命指向性のきわめてたかい彼らの宗教の根幹をなすのである [STANNER 1965: 217]。

3. 媒体としての血と汗

肉体をもつ生命としての人と、肉体をもたない生命である精霊にとって、血と汗はともにもっとも重要である。それは死者の魂をよびもどし、精霊の存在と人の再生を確かなものとする。しかし、筆者が知りえたジナン族の創世神ワギラルク Wagilark 姉妹の神話¹⁾は断片的にすぎて、血と汗が神話に語られるのかどうか明らかでない。そこでアーネムランド諸族の民族誌にその解答を求めてみる。

[血] 東アーネムランドのムルンギン社会に語られる創世神ワウィラク Wawilak 姉妹の神話では、血は姉の月経の血 [WARNER 1964: 240-249] か、もしくは姉のあと産の血または姉が出産した赤坊の体についていた血 [BERNDT, R.M. & C.H. 1985: 254-255; BERNDT 1974: Fascicle 2: 12-13] にはじまる。この血は男性のイニ

1) ジナン族のワギラルク姉妹の神話は、男性の創世神ジャンカオ Djankow とマンブ Manbu の旅として語られる。その神話には2つのバージョンがある。

神話1 ムッカルがガタラーラへ戻ったあと、ジャンカオとマンブがムッカルのみつけた植物や魚、動物をふやす旅にでかけた。

2人の男の精霊ジャンカオとマンブは、ワギラルクの2人姉妹の精霊をともなって、ガデヤルク Gadeyarku からムッカルのとを追ってやってきた。ジャンカオとマンブは拍子木(楽器)をもち、砂のはいったディリー・バッグ Dilly-bag をさげてきた。この砂はイリチャとドゥアのもので、ガデヤルクをでるときにもってきた。彼らはムッカルのとを追いつき、太陽について東から西へ旅していた。やがて彼らはダッチ Duttji カントリーに着いた。

ジャンカオとマンブがダッチに着いたとき、その島にはたくさんの人が暮らしていた。彼らはその人たちをヤリとヤリ投げ器、石斧ですべて殺してしまった。

ワギラルクの2人姉妹はジャンカオとマンブと一緒に旅をつづけた。彼女たちはそれぞれ1本ずつ掘り棒をもっていた。その掘り棒をおどり歩きながら地面にさすと、そこに泉ができた。2人姉妹はこうしてドゥアのカントリーにいくつかの泉をつくりだした。やがてジャンカオとマンブが戻ってしまうと、2人姉妹はニジヘビに生れかわった。そしてひとは南へ旅をつづけ、ユルル Yulluru(エアーズ・ロック)に家をみいだしそこにすみついた。もうひとは西への旅をつづけた。

神話2 ジャンカオとマンブが旅をはじめのまえ、地球はちょうど割った卵のようにゆらゆらゆれ動いていて、陸はまだどこにもなかった。やがてそれが乾きはじめ、陸地ができたところ、ジャンカオとマンブは旅にでた。マンブはディリー・バッグに石と白粘土、それに砂を入れ、赤坊をだいてやってきた。一方ジャンカオはヤリ投げ器、ヤリ、石斧などの道具をたずさえていた。マンブが石を火になげ入れると、石は4つに割れ、そのひとつが赤絵具になった。

このように、筆者が記録できたジナン族のワギラルク姉妹の神話は断片的であり、そこに血と汗が語られているかどうか明らかでない。

シエーションの儀礼とふかくむすびつく。姉妹の創世神は、誕生した赤坊にいずれ割礼をほどこさなければと話しているからである。

たとえば、ムルンギン社会における男性の最初のイニシエーション、ジュングアン Djunguan [WARNER 1964] またはジュンガウォン Djunggawon [BERNDT 1974] の儀礼では、年長の男性の腕を傷つけてとった血を、少年に割礼をほどこす直前に、儀礼の踊り手である年長の男性の身体にぬり、彼らを装飾する羽毛の糊として用いる。その血は姉妹の創世神ワウィラク Wawilak の膺の血とみなされ、これを介して人びとは創世神との直接的なつながりを獲得する。それゆえに、この血をぬることで人びとは神聖化され、あらたな力を与えられる。ただし、その血は、姉妹をのみこんだニシキヘビ（彼らのトーテムでもある）のエッセンスを含むため力が強く、割礼をうける少年の装飾には用いない [WARNER 1964: 249-280 とくに 265-272; BERNDT 1974: Fascicle 2: 13]。

また、男性の第2段階のイニシエーションでは、アーネムランドにひろくみられるグノピビ Gunopipi 儀礼 [BERNDT, R.M. & C.H. 1970: 138-142; BERNDT 1974: Fascicle 2: 12; BERNDT 1974: Fascicle 3: 4] やムリンバタ Murinbata 族のカルワディ Karwadi 儀礼 [STANNER 1959: 112-115] において、イニシエーションをうける若者を血で装飾する行為が認められる。ここでもその血は、さまざまに語られる姉妹の創世神の月経やあと産の血にはじまるとみなされている（ただし、西アーネムランドのグウィング Gunwinggu はグノピビ儀礼に用いられる血を身体装飾のための羽毛の糊以上に評価していない [BERNDT, R.M. & C.H. 1970: 234]）。

男性のイニシエーションにおけるいわゆる血の儀礼に用いられる血は、創世神の行為に由来する。それゆえにこの血による装飾が人を神聖化し、人にあらたな生命力、強靱さ、勇気を与えるのである [ELKIN 1981: 206; BERNDT, R.M. & C.H. 1985: 171]。その血を人は共有する。

【汗】 この血に反して汗は、神話に語られない²⁾。少なくともムルンギン社会にお

2) ただし、汗はジナン族の「月の誕生」の神話の冒頭でつぎのように語られる。

この世の始まりのとき、ガバルク Gabaruku という名の男と、ガルワルピ Garuwarpi とムヌベル Munuberu という2人の妻、そして彼らの2人の子供と、ガルワルピがたずさえていた赤坊が暮らしていたころ、空は大地にほとんど接するばかりに低く、木ぎもあまりに低かった。だから太陽が空にのぼると、大地は焼け、人びとはすごい汗をかかねばならなかった。

この神話は、創世時代が「多汗の時代」であったことを物語る。しかし、そのことと後述の少年や若者を神話世界へ導き、魂を精霊世界へ導く媒体としての汗がどのような文脈のなかで解釈できるものなのか、筆者にはまだ明らかでない。

けるジュンガオ姉妹とウォィラク姉妹の創世神話には、汗は登場しない [WARNER 1964: 240-249, 325-330]。グウィングについても同様である [BERNDT, R.M. & C.H. 1970]。それにもかかわらず、汗は、男性のイニシエーションの儀礼において一定の役割を果たしてきたことが、民族誌の記述から明らかである。

ウォーナーによると、ムルンギン社会における最初のイニシエーション、ジュンガン儀礼において、少年に割礼をほどこす直前の段階で姉妹の創世神の血で踊り手を装飾したあと、つぎの行為がおこなわれる。

「割礼をうけるべき少年は、ダンス・グラウンドで、長老たちによってペインティングされる。そのあと少年は長老によって、ニスキヘビの砂の彫刻にみちびかれる。そこで、ある1人の年長者の腋の下の汗が、少年のまぶたにぬられる。それは、このあとにつづく儀礼のために、彼らの眼に力を与えるためである」 [WARNER 1964: 272]。まぶたに汗をぬられたあと、少年はいくつかの動物の踊りを初めてみる。ついで彼らは、姉妹の創世神をのみこんだニスキヘビの砂の彫刻の意味を教えられ、割礼をうけることになる。

この最初のイニシエーションの儀礼につづいて、ムルンギン社会におこなわれる第2段階のイニシエーション、グノピビ儀礼にも汗が登場する。

10のステージに分けて記述されるこの儀礼において、その第6段階では、ニスキヘビを表象する砂の彫刻がつくられ、そこでヘビの踊りがおこなわれる。これにつづく第7段階では、イニシエーションをうける若者は小枝を腋の下にはさまれる。ついで、イリチャ半族のヘビの踊り手とドゥア半族の儀礼のリーダーが、自らの腋の下の汗 (arm sweat) を若者のまぶたにぬる。そのあと若者はウォィラク姉妹のダンスをみ、ニスキヘビをあらわすポール、イェルメリンディ Yermerlindi がもつ意味を教えられる。

さらに儀礼の第8段階では、男女間の儀礼的な贈答のあとにおこなわれるある種の行為にも汗が登場する (この行為の具体的な内容は「付記」した理由から引用を割あいた) [WARNER 1964: 292-298; BERNDT 1974: Fascicle 3: 4-5]。

男性のイニシエーションの儀礼に汗が一定の役割をになう例は、ムルンギン社会に限られない。西アーネムランドのグウィングのグノピビ儀礼 (第2段階のイニシエーション) では、イニシエーションをうける若者は、彼らが隠されていた儀礼のためのキャンプからダンス・グラウンドにむかって移動し、ニジヘビを象徴するガナラ Ganala とよぶ砂の彫刻 (地面にほられた浅い溝) に入る。それは彼らが姉妹の創世神と同じようにニジヘビに飲みこまれたことを示すと同時に、母の子宮に入りこんだ

ことを意味する。それはやがて、ガナラから若者がでることを暗示する。その行為は新しい地位を獲得した人への変身の予兆である。この一連の行為のまえに、若者は汗をまぶたにぬるのである [BERNDT, R.M. & C.H. 1970: 141]。

うえに引用した汗に関する記述からは、つぎのことが導かれる。

①汗はさまざまに語られる姉妹の創世神話には登場しない。この点が血と異なる。すでに述べたように、血は月経、出産とかかわって言及された。

②姉妹の創世神話に語られないものの、汗は、イニシエーションの儀礼のなかで、少年あるいは若者に力を与えるものとして登場する。とくに彼らがそれぞれの段階に応じた神話世界を初めてみることになるため、眼に力を与えるものとしての汗が強調される。

③汗を提供するのは、儀礼のリーダーを含む年長者である。

④それは、年長者が神話世界のすべて、もしくは少なくともそのかなりの部分をすでに知っているからである。それゆえに年長者の汗は血と同様に力にみちたものであり [WARNER 1964: 272]、少年や若者を神話世界に導くことができるのである。しかもそれがおおくの場合、腋の下の汗であるのは、儀礼がもたらす精神的・感覚的な刺激によって、手や足の裏とともにこの部位に発汗が生じやすいという人の生理にもとづくのである。

これらのことから、汗は、それぞれの年齢段階ごとに、人と神話世界をむすぶ媒体であることが明らかである。この媒体としての汗がもつ力は、創世神の血の力に比較できる。それは葬送儀礼においても病の治療においてもかわらない。

すでに第1章で触れたように、アーネムランドにおいては、死者の遺体にペインティングされた模様を初めてみる若者（最初のイニシエーションをすませた若者）は長老の腋の下の汗をまぶたにぬらなければならない [PETERSON 1976: 97]。これは儀礼の場面の転換であって、汗にかかわる文脈は、イニシエーションについて述べたところと変るものではない。それはカカドゥ Kakadu 族における呪術に起因する病の治療にも共通する。

スペンサーによると [SPENCER 1914: 318-320]、ヌッパダイトバ Nuppadaitba という名の魚の骨を用いた他部族の呪術によって、カカドゥ族は病気になることがある。それを治せるのは、例外的な能力をもったアボリジナル・ドクターだけであり、その治療法は、①患者をあおむけにねかせ、②胸に息をふきかけ、③腋の下の汗を患者の

胸にぬり、④魚の骨が身体からとりのぞかれるまで患者の胸をすいつづけるというものである。それがきわめて能力のたかいドクターにのみ可能とされるのは、呪術の力に対抗する必要からであろう。

こうして汗は、病の治癒能力をももつのである。それは、ケペリ Kaberry が推測するような健康な人の排泄物をもつ力 [KABERRY 1973: 248] と同じ強い力を、汗に認めていることを明らかにする。そしてその汗は、人と神話世界をむすぶ媒体として機能する。

IV. カントリーとワンジル

1. ムッカルの旅

永遠に不滅の、非有機的な生命の保持者として血と汗とともにある祖先の精霊は、時がくるまでブラウィリ、別名ワンジルに暮らす。そのワンジルは、創世時代の精霊、ムッカルの旅の神話に語られる。

「この世の始まりのとき、地球はまるで卵のようにさけ、あらゆる水が卵から流れ出た。その水は卵みたいにあるものは白く、あるものは黄色であった。洪水がおわり、黄味はまだなまのままで、白味もまだやわらかい。ムッカルは乾いた大地をみつけるために次の年をまちつづけた。彼は卵が固く乾くまで何年もまちつづけた。それでもまだ黄味は少しやわらかく、彼はさらに次の年をまちつづけ、さらにそのすべてが固まるまでまだ年をまちつづけ、その後、旅に出た。ムッカルは東から西へ旅をしていた。彼は、われわれがいま暮らすあちこちの土地に名前をつけていった。ムッカルは旅をはじめるにあたってカヌーをつくり、ガタラーラ Gatharara から海を旅して陸地をさがしにでかけた。彼はある陸地をみつけ、その土地が乾きはじめると、そこにツルつまりダンゴルチャ Dangortjia、ヤムすなわちバリチェ Baritje や、魚などの食物をみつけた。彼はさらに陸地ふかく、太陽マンブンマンゲ Madnbmange のしずむ方向へ旅をし、やがて夜マルレ Marle になった。そこでムッカルは、長短2本の棒をさがし出し、一方に2つの穴をほって火をつくった。これが火おこし棒の始まりである。

しばらくして彼は、空にまたたく不思議な星をみた。彼はそれをバルヌンビル Barnumbirr とよび、無数の小さい星をガルダ Garda またはガッタ Gadta と名づけた。真夜中にみた天の川にボロロ Borrorror とワンダラ Wandalla という2つの

名を与えた。やがて天の川はうつり夜が明けはじめた。朝になると、ムッカルはエルコ Elcho 島の近くにやって来て、赤い石を見い出した。その石を肌にくすってムッカルは「これはどうして、こう赤いのだろう」といい、赤オーカーにマルナル **Marnarr** という名をつけた。それ以来、人が死ぬと、またはセレモニーにあつまった人達は、体に赤オーカーを塗るようになった。

エルコ島近くの陸地で赤オーカー、マルナルをみつけたあと、西へ旅した彼はいまのメルウェンビ **Merrwenbi**(ガマディの北約 30km にあるジナン族のアウトステーション) 周辺をブラウイリとよんだ。それ以来、われわれが死ぬと、その血と汗はブラウイリへもどる。ムッカルがきた道をたどって、本来のカントリーへもどるのだ。

「その後ムッカルは、ナンガララ **Nangalala**(ガマディ東方 40km にかつてあったキャトル・ステーション) の方へ旅をつづけ、カントリーや小さい鳥、魚、小さい魚やあらゆる食物に名前を与えた」。

「東から西へ旅してきたムッカルは北へまわり、そこでよく乾いたよい土地をみつけた。そしてそこで最後の野火をつくった。火は北から南へと、あらゆるものを焼き払い、土地をきれいにした。この野火をおこした後、ムッカルはガタラーラへ帰っていった」。

「その後、再び創世時代の精霊ムッカルがもどってきた。彼は家族と一緒にだった。ムッカルは家族をジマルウ **Djimarluw**(ガマディの北、海岸に近い場所の地名) にすまわせた。ジマルウはわれわれのカントリーだ。そこに家族をすまわせると、再び彼は旅にでた。彼が名づけたすべてのものが、いまでも生きつづけているのを確かめるために。この旅をおえるとムッカルは永遠にガタラーラへ戻ってしまった」。

このムッカルの旅の神話は、“もの”と事柄の起源を説明する。それは、①洪水におおわれていたこの世界における陸地の生成であり、②名前を与えることによる動物の種の起源である。それは③金星バルヌンピルをはじめとする多数の星と天の川を名づけることによって天空におよぶ。そのあと、④ドゥア半族のカントリー、火おこし棒と野火、赤オーカーとボディ・ペインティング、人の血と汗の移動といった事柄が起源すると語る。さらに⑤この人の血と汗とは、ムッカルが旅した道を逆にたどって西から東へと移動すると説明する。

これらの事柄とともに、ムッカルの旅の神話は、ワンジルについてつぎのように語る。①「ムッカルは海を東から西へ旅していた。陸地をみつけたムッカルはいまのメルウェンビ周辺をブラウイリと名づけた。それ以来、われわれが死ぬと、その血と汗はブラウイリへもどる。ムッカルが来た道をたどって本来のカントリーへもどる」。

⑥「ムッカルは彼の家族をジマルウにすまわせた。ジマルウはわれわれのカントリーだ」。つまりブラウィリ，別名ワンジルは，この地上の具体的な場所であり，創世神がそれを指示したのだと説明する。

2. カントリーとワンジル

そのワンジルは，すでに述べたララジェジェの神話と「人の血と汗」にも見いだされる。

ララジェジェの神話は，①「人が死ぬと2～3カ月間埋めてそのままにし，ついでララジェジェ（ホロー・ログまたはラルカン）をつくり，彼にこの土地ワンジル，別名ブラウィリを与える。われわれは彼自身のカントリーをブラウィリとして与える」と語る。

また「人の血と汗」には，②「死者の血と汗は死者のカントリーであるワンジルへもどる。この血と汗をおって死者のスピリットがブラウィリへもどる」とも，③「人が死ぬと埋葬したあと，まず小さな穴ワンジルをつくり，その穴の2カ所—東と西—で体をあたたため，ワンジルをうたう。するとすべての汗が本来のカントリーへいくのをみいだす」とも述べる。

このように語られるワンジルを人びとは説明する（図3）。ワンジル，別名ブラウィリには，「ジナン族ドゥア半族のすべての人が暮らしている。人が死ぬと死者の血と汗とは地下にもぐってまず西のブグンダ Bugunda に旅し，ついで東の旅にでる。死者の魂はこの血と汗をおって西へ旅し，そこにとどまる。われわれが，葬送の儀礼で死者が生前に使用していたヤリとヤリ投げ器を折ると，やがて死者の魂，つまり精霊は東のガタラーラへ旅だつのである」。

死者の血と汗は魂を精霊世界へ導く媒体であり，これらと魂がまず西にいきそれから東へ移動するのは，すでに述べたムッカルの旅にもとづくのである。

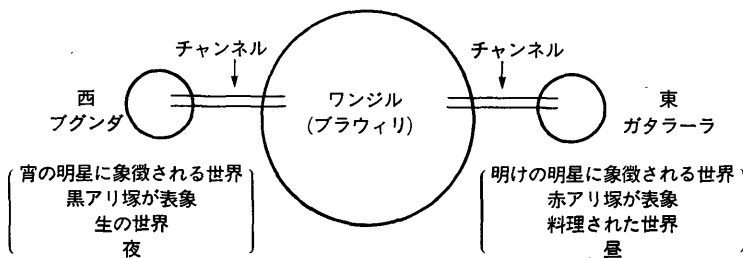


図3 ワンジルとカントリーの構造

「その西にあるブグンダは、宵の明星ブグンダとクロアリ、ウエンディ・ムルング Wendi mlungu に象徴される冷たい生の世界、すなわち夜である。東のガタラーラは、明けの明星ガタラーラとアカアリ、ゴイコイ Goikoi が象徴するあたためられ料理された世界、すなわち昼である。この2つの世界のあいだを2種類のアリは地下をとおっていつも旅し、チャンネルをつくる」。それを彼らは図3のように描くのである。

さらに、ワンジルとカントリーについて、たとえばウヌウン氏は「俺の母方（イリチャ半族）のカントリーはガッチ Gatji だ。ガッチはまさしくウラッキ Wurrakki(ウヌウンの母が属したクラン) だ。これがワンジルのひとつだ。ワンジルであるこの土地には西風と東風がふき、ヤムが、チョウつまりボンバ Bomba がいる。それらはいつもそこにいる。ギンジャ Gindja(ペンガルボダイジュ)の木もフクロウも」と語る。

ところで、上述したララジェジェの神話と「人の血と汗」に語られる内容①～③と、ムッカルの旅の神話が語る内容②と⑥、それにウヌウン氏のワンジルの説明は、カン

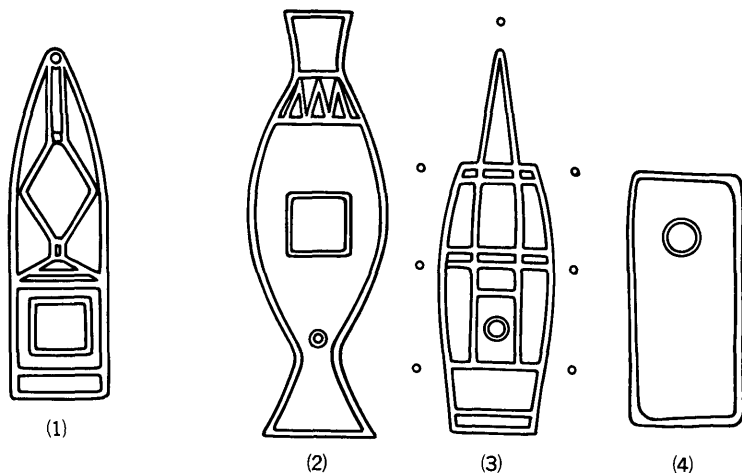


図4 葬送の儀礼に際してつくられるワンジルの例

(1)～(3)は Peterson [PETERSON 1976: 102] による。

- (1) ドゥア半族のワンジル。内部の造形はミツバチを、下部の四角形は神聖な泉をあらわす。1937年ミリングンビ Milingimbi で観察された。
- (2) イリチャ半族のワンジル。魚をあらわす。1937年ブルー・マッド Blue Mud 湾で観察された。
- (3) ドゥア半族のワンジル。姉妹の創世神の神話に由来するもので、左右と上部の円は姉妹の創世神がほり棒を地面につきさしてつくった泉をあらわす。1937年ミリングンビで観察された。
- (4) 筆者が1984年8月に、中部アーネムランドのブライス Blyth 川河口右岸で観察したイリチャ半族のワンジル。円は神聖な泉をあらわす。

トリーとワンジルが同一のものであり、同時にそれは肉体をもつ生命としての人が住むべきカントリーと非有機的な生命が暮らすワンジルという相違性を内包することを明らかにする。そのワンジルは、ムッカルの旅の神話に示されるように (a)と(b) 創世時代の精霊がつくり、彼の家族が暮らしたところである。つまり、神話世界あるいは人の血と汗、死者の精霊や創世時代からの祖先の精霊の世界としてのワンジルと、現実の地理的なひろがりをもつ「その土地」であるカントリーの両者は、同一性と相違性を内包しつつ同じ空間で重なりあっている。葬送の儀礼においてうたわれ、死者を埋葬したあとに残った人びとを浄める砂の彫刻ワンジル (図4) は、精霊世界の象徴でもあり、現実の世界でもある。

このワンジルが、赤と黒の2種類のアリがつくったチャンネルをもつゆえに、人はどこで死んでも本来のカントリー、つまりワンジルへもどれるのである。それが「もどれるところ」であるゆえに、「その土地」への回帰を人はつよく願うことになる。ジナン族は、地上のカントリーとワンジルをこのような構造をもつものとして認識する。

3. 天空のワンジル

このワンジルは、より神話的な色彩の濃いものとして、換言すれば地上とは別の文脈において天空にも語られる。この天空のワンジルへも人の魂ウォゴールレが導かれる。それには、フクロウつまりバンドル **Bandle** と精霊ムンチャリル **Munyaril** の手助けが欠かせない。そのムンチャリルはつぎのような性格をもつ精霊である。

「ムンチャリルはごく小さくまたたく星のような存在で、毎夜どこかにいて人びとを見つめている。そして、人が病気をわずらったり、ヤリをうけて傷ついたりすると、毎夜その人の上空に来て死ぬのをまつ。人が死ぬと彼は糸パダイ **Badai** をつたって降りたち、死者の魂ウォゴールレをとりあげ、天の川ボロロ **Borrro** をとおって、それをガタラーラへと導いていく。それというのも、昔ムンチャリルはこういったからである。『俺は人が死んだムンチャ **Munya** の夜に、ボロロをとおり、ガタラーラをおって、お前の魂をお前のカントリーにつれていこう。』しかし、これにはフクロウの手助けがいる。創世時代の精霊ムッカルが創造したフクロウは、人の魂ウォゴールレに、どこでムンチャリルを待つべきか、どこがガタラーラへの道なのかを教える。彼はムンチャリルがくるまでの間、その魂を世話するのである」。

ここでは、①ムンチャリルは夜に活動する精霊であり、②彼はフクロウをなかだちにして、死者の魂を彼のカントリーに導いていく。③それは糸をつたって降りてきた

ムンニャリルが、天の川とガタラーラをへて、死者のカントリーにいたる旅である。
④そしてフクロウは、人の死の直前か直後の一時期、魂ウォゴールレをあれこれ世話する役割をもつのである。このフクロウと精霊ムンニャリルに導かれて、人の魂ウォゴールレは精霊になる。この魂を精霊世界へ導くのは、さきの血と汗と異り、ここではフクロウと精霊という神話の主人公である。その場所はまずガタラーラであり、そののちにうつるワンジルである。このガタラーラとワンジルの関係は、つぎのように

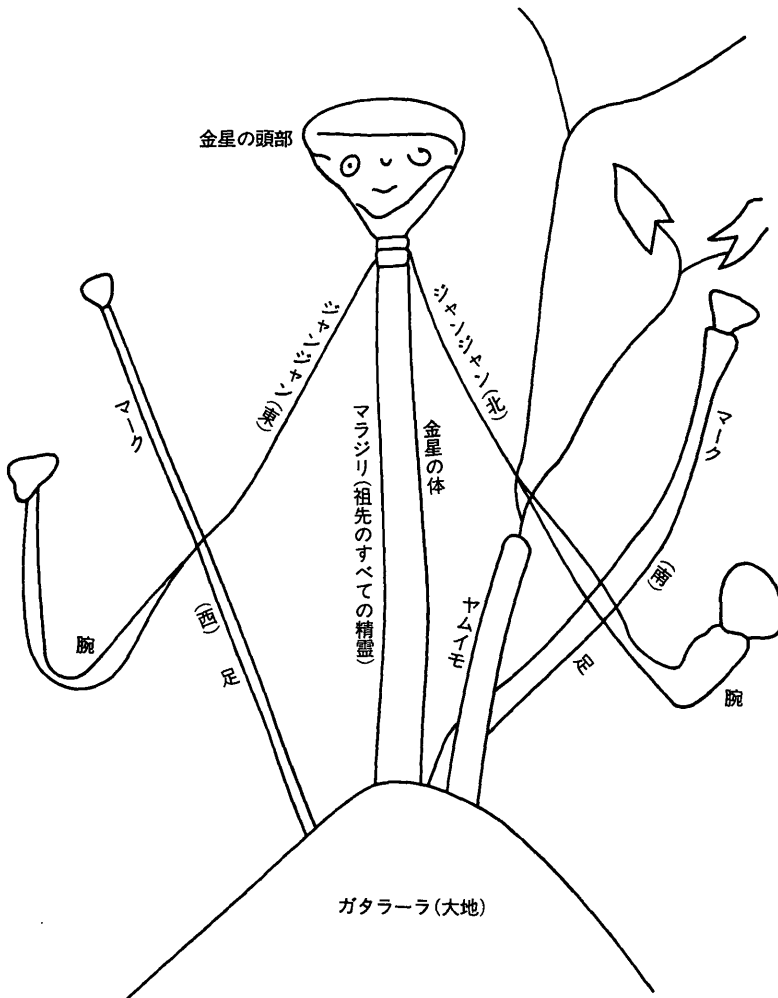


図5 金星を象徴するマラジリ Maradjiri と大地

マラジリは金星をたたえ、祖先をまつる「星まつり」につくられる。マラジリの腕ジャンジャン Djangdjang の先端につけられた羽毛の房は、それぞれ宵の明星と明けの明星をあらわす。マークは、このまつりの開催をつげるために用いられたメッセージ・スティック。

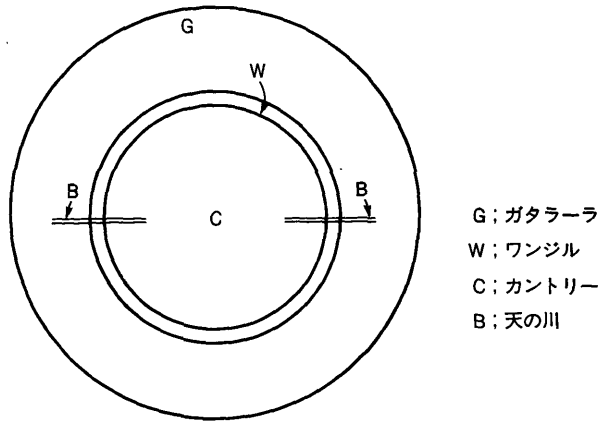


図6 天空に投影されたワンジルとカントリー

解釈できる。

ジナン族の神話上の祖先、金星バルヌンビル **Balununbir** は彼自身のために大地をみつけた。その大地ガタラーラにたつバルヌンビルをジナン族は人形とみる [松山 1988a: 423] (図5)。この人形の2本の腕の先端にとりつけられた羽毛の房は、それぞれ宵の明星と明けの明星であり、東と北を指示する腕ジャンジャン **Djang-djang** は、天の川に対比される。この天の川は2つの金星と、人形がたつ大地ガタラーラをつなぐチャンネルである。そのガタラーラは、おそらくジナン族のカントリーでもある。そこは神話上の祖先、金星が最初に暮らしたところだからである。

そして、この金星が天空にあり、ムンチャリルもまた空にまたたく星のような存在であるところから、人形をしたマラジリ **Maradjiri** は、図3に示されたさきの地上のワンジルとカントリーを天空に投影する (図6)。そこでは、マラジリがたつガタラーラのなかにワンジルとカントリーが重なりあう。これとガタラーラとをむすぶチャンネルが、天の川ポロロである。それらは夜ごとに再生される天空 (「ムッカルの旅」の神話が語るように、ジナン族は天空が移動すると考えていた) にある。

V. ま と め

「現代の狩猟民」に変容したジナン族がなおつよい「愛着」をもつカントリーは、上述した構造をもつ祖先の精霊が暮らすワンジルでもある。そこは彼らにとって「帰ることのできる」土地であり、それを可能にするのは人の血と汗である。神話はその

ことを人びとに教える。その神話を彼らはいまなお語りつづける。このことによって、彼らは神話世界の論理を保持しつづけているのである。

かつてのアウトステーション建設運動の背景には、こうした彼らの神話世界があった。それがアウトステーション（小集落）の立地を決定づけたのである。

その神話世界の論理は、あらたに出現した白人を、「ムッカルの旅」の神話のなかで、カントリーをさがす人びととして語る。

1. 白人の出現とカントリー

「洪水がおわり、黄味はまだなまのままで、白味もまだやわらかい。ムッカルは乾いた大地をみつけるために次の年をまちつづけ、その後、旅にでた。白味はまだやわらかく、まだゆらゆら動いていた。だから白人と魚はいまもって水の中だが、われわれアボリジニと木ぎや草はあたためられ、料理された。白人が料理されるには、あまりに遅すぎた。われわれは最初に来たのだ。

白人も同じ場所からスタートしたが、彼らは寒いところへ旅した。しかし、彼らはいま戻ってきて彼らのカントリーをさがしはじめた」。

これは「神話の語り手がいくつかの問題を要約したり、その詳細を入念に話す」[BERNDT 1984: 122-123] ことを例証する。それゆえに彼らの神話は、白人の存在という現実を語りうるのであり、彼らを「いま戻ってきてカントリーをさがしはじめた」人びととして位置づけるのである。

その一方で、カントリーを離れて暮らすことになったアボリジニ自身も、「帰れるところ」である「その土地」への回帰を願う。

2. 生きている証し

カントリーを離れて、ジナン族のアウトステーション、ガマディに暮らすジンバ Djinba 族の著名な木皮画家である男性（推定年齢40歳、イリチャ半族）は、84年につきのように語った。

「ガマディに来て、もうかれこれ7年になる。1度ゆっくり休みたい」。休日に何をするかとの問いには、「私のカントリーへ旅をしたい。私のカントリーでしばらく生活したい。けれどトラックがないので行けない。今度の展覧会の金でトラックをかう。休日をもちたい」と答える。

そして86年にはこう話す。「ながい間、自分自身のカントリーへいっていないし、暮らしてもいない。自分のカントリーへいって住みたい。いずれ白人の役人に相談す

る。私のカントリーは、ラマンガニン Ramingining(ガマディの東約40kmにあるアボリジナル・タウン)よりさらに数km東にあたるが、なんとかしてマニングリダのサポートを受けられるようにしたい。その約束をとりつけてから建設にかかる」。

「父のカントリーのどこがもっともよいかトラックを手に入れたらみてあるき、場所をきめる。つぎの乾季にこの作業をし、建設にとりかかりたい」。

「2人の弟の家族と母、私の家族があつまって住みたい。弟たちもアウトステーションをつくること、一緒に住むことに賛成してくれている。それには、まずなによりも無線電話が必要だ」。

その彼は88年につぎのようにいう。「この乾季にトラックを買った。いまは故障してラマンガニンにある。黄色のトヨタ。ラマンガニンにはかれこれ1年ほどおいたままになっている」。

この男性の話は、彼自身の血と汗と魂とが帰るべきところとしての自らのカントリーを常に認識し、そのカントリーへの思いを彼がかきたてていることを明らかにする。それはカササギガンやクビナガメ、ヒルやミズヘビがすまい、ハスが花さき実をつける世界として木皮画にも描かれる。その思いは、ガマディに暮らしているという現実の改変を彼に要求し、トラックを購入させる。それはまさに、彼が肉体をもった生命として生きていることの証しなのである。

付 記

第3章にとりあげたイニシエーションの儀礼グノビビは秘儀とされ、現在の彼らは、アボリジニ以外への儀礼の公開をよく拒否している。筆者もまだこの儀礼への参加が許されていない。こうした事情があるため、民族誌からの儀礼の引用は最小限にとどめた。

なお、この報告は、1984・86年度の文部省科学研究費補助金、海外学術調査(代表者 国立民族学博物館、小山修三氏)と88年度および90年度の同じく海外学術研究(代表者 筆者)の成果の一部である。

文 献

バンヴェニスト, E.

1986 『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集 1 経済・親族・社会』前田耕作監修, 蔵持不三也ほか共訳, 言叢社。

(BANVENISTE, E. 1986(1969) *Le Vocabulaire des Institutions Indo-Europeaness 1.*

Economie, Parente, Societe. Paris.)

- BERNDT, C.H.
1984(1982) *Sickness and Health in Western Arnhem Land: A Traditional Perspective.* In J.Reid (ed.), *Body, Land and Spirit: Health and Healing in Aboriginal Society*, St. Lucia: University of Queensland Press, pp. 121-138.
- BERNDT, R.M.
1974 *Australian Aboriginal Religion.* Leiden: Institute of Religious Iconography, State Univ. Groningen.
- BERNDT, R.M. & C.H.
1970 *Man, Land and Myth in North Australia: The Gunwinggu People.* East Lansing: Michigan State University Press.
1985(1964) *The World of the First Australians: Aboriginal Traditional Life: Past and Present.* Adelaide: Rigby Publishers.
- ELKIN, A.P.
1981(1938) *The Australian Aborigines.* Sydney: Angus & Robertson Publishers.
- KABERRY, P.M.
1973(1939) *Aboriginal Woman: Sacred and Profane.* New York: Gordon Press.
- 松山利夫
1988a 「アーネムランド・アボリジニ, ジナン族の狩猟と食物規制」『国立民族学博物館研究報告』12(3): 613-646。
1988b 「アーネムランド・アボリジニ, ジナン族の星まつり—国立民族学博物館海外映像音響資料収集の記録—」『国立民族学博物館研究報告』13(2): 407-435。
1990 「アーネムランド・アボリジニの生活史—ジナン族ガマディ・アウトステーションに居住する2人の男性の事例—」『国立民族学博物館研究報告』14(4): 783-820。
- PETERSON, N.
1975 *Hunter-Gatherer Territoriality: The Perspective from Australia.* *American Anthropologist* 77: 53-68.
1976 *Mortuary Customs of Northeast Arnhem Land: An Account Compiled from Donald Thomson's Fieldnotes.* *Memories of the National Museum of Victoria* 37: 97-108.
1983 *Rights, Residence and Process in Australian Territorial Organisation.* In N. Peterson(ed.), *Aborigines Land and Land Rights*, Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, pp.134-145.
- SPENCER, B.
1914 *Native Tribes of the Northern Territory of Australia.* London: Macmillan and Co., Limited.
- STANNER, W.E.H.
1959 *On Aboriginal Religion I: The Lineaments of Sacrifice.* *Oceania* 30(1): 108-127.
1965 *Religion, Totemism, and Symbolism.* In R.M & C.H.Berndt (eds.), *Aboriginal Man in Australia: Essays in Honour of Emeritus Professor A.P. Elkin*, Sydney: Angus & Robertson Publishers, pp.207-237.
- TINDALE, N.B.
1974 *Aboriginal Tribes of Australia: Their Terrain, Environmental Controls, Distribution, Limits, and Proper Names.* Berkeley: University of California Press.
- WARNER, W.L.
1964(1937) *A Black Civilization: A Social Study of an Australian Tribe* (Haper Torchbook Edition), New York: Haper & Row Publishers.